

令和6年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和7年1月23日

江別市立大麻泉小学校

1 本年度の重点目標

夢を育み、未来をたくましく切り拓く、子どもの育成 ～認め合い、主体的に考え、よりよく行動する～
--

2 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
経営方針の重点	○教育目標の具現化を意識し、日常の教育活動を推進することができたか。 ・意欲を引き出す教育活動の推進 ・活動と伸びの「見える化」	A	・毎日の授業、各行事などの日常的な教育活動において、児童の意欲を引き出すために、学年・学級経営において、「自己肯定感」を高めるよう努めてきた。 ・活動の「見える化」を意識し、取り組んでいる。体力テストの歴代記録、読書貯金等の目標達成状況を掲示したりすることにより、子どもの意欲を高めようと努めた。次年度も、「主体的に学ぶ意欲」を引き出す工夫について知恵を出し合い、教育活動を推進していきたい。	A	A
	○学級、学年の枠を超え、「協働体制」に基づくチームワークが発揮されたか。 ・全職員で全校児童を育てる	A	・何においても「指導の統一化」が重要であることを意識してきた。学習や生活面において、常に情報共有を行い、「指導のばらつき」がないよう努めてきた。 ・担任だけではなく複数の教職員で指導や支援を行い、教育効果を高めている。 ・職員研修において、個々の教育技術（教科指導、生徒指導、ICT活用など）について紹介したり、交流したりすることによって、教職員全体の技量の底上げを図ってきた。特に、初任層にとっては、有意義な機会となった。	A	A

	【目指す児童像の実現に向けた取組】 ○自ら気持ちを込めた挨拶をするとともに、継続的に児童に対して指導することができたか。 ○イズミズム（学習規律）を身に付けさせる指導を行い、意欲をもって学習に取り組むよう指導することができたか。 ○児童が自分のよさを自覚できる場を意図的・計画的に設定し、自己肯定感を高め、相手を気遣うことができるような指導を重ねることができたか。 ○運動に親しむ機会を意図的・計画的に設定し、運動の楽しさを実感させることができたか。	A	・挨拶、進んで学習に取り組む、自己肯定感、いずれも児童アンケートにおいて高い評価を得ることができた。学校での日常的な指導はもとより、家庭のバックアップも大きい。引き続き、学校や家庭、地域と連携し、児童の育成に努めていきたい。 ・運動能力については、取組の結果へとつながり、多くの種目で全国の平均値を上回る結果であった。また、体力テストの歴代記録を掲示することで、児童の運動への意欲を引き出すよう努めた。	A	A
教育課程 学習指導	○地域や学校の特性を生かし、創意と調和のとれた教育課程の編成・実施・評価を進めることができたか。	A	・教職員に、児童が主体となる授業を意識させることで、対話や交流などの場面が日常的になり、学習の質も向上した。 ・学校行事については、前年度の反省を生かし、今年度の実態に合わせて実施方法を変更したり、工夫したりしながら、効率よく取り組むことができた。 ・60分授業は、定着している。今年度の実践を振り返り、創意工夫を凝らした教育課程の編成に今後も努めていきたい。	A	A
	○ICTを活用する等、わかる授業づくりに努め、確実な定着につなげることができたか。	A	・ICT（一人一台端末や電子黒板等）を活用した授業実践は、どの学年においても日常的に行われており、効果をあげている。デジタルドリルは、朝学習や宿題等でフルに活用し、児童の学力向上や教職員の負担軽減につながった。 ・授業の中で、終えられなかった学習や十分に理解できなかった学習をそのままにせず（やりっ放しにしない）、昼学習（給食準備時間）等でケアする取組の質を高めたい。	A	A

	○児童の実態に沿った校内の研究課題を設定し、理論に基づく実践を積み重ね、教職員としての専門性向上に努めたか。	A	・教職員が自らの持つ指導技術を広めたり、児童役となって模擬授業を行ったりするなど、授業改善を行ってきた。 ・研究内容やその取り組み方については、指導主事の方からご助言いただいたが、研修の内容をいかに個々の授業力向上につなげるかが継続中の課題といえる。	A	A
生徒指導	○いじめの未然防止・早期発見・早期対応に組織的に取り組むことができたか。また、児童会活動や学級活動において意図的・計画的な取組を推進できたか。	A	・いじめの未然防止の取組については、3回の「いじめアンケート」をベースにしながら、教育相談の充実を図ってきた。教育相談を設定し、全児童との面談も行っている。「先生は見てくれている。」という安心感を児童に与えることができるように今後も学校全体での取組を継続したい。 ・いじめ根絶に向けた児童会の取組も推進している。	A	A
	○児童交流を定期的に実施し、『全職員で全校児童を育てる』意識を持ちながら組織的な指導を推進することができたか。	A	・「全校児童を全教職員で育てる」ということは学校長の経営方針に強く打ち出されているものであり、教職員の意識も高い。時間の確保に難しさもあるが、職員会議で「児童交流」の機会を設定し、全職員で全校児童の状況（よさや課題）について共有するようにし、効果をあげている。	A	A
道徳教育	○対話を通して学び合い練り合う活動を充実させる授業づくりによって、生命を尊重する心や他者を思いやる心を組織的に全教育活動の中ではぐくむことができたか。	A	・道徳の授業では、自分の思いや考えを豊かに表現する手立てを工夫し進めることができています。 ・授業の終わりには、その時間での自己の変容について振り返る場面を設定し、自身の成長を感じさせるよう努めてきた。道徳教育は、授業のみならず、全教育活動の中で確実に行うべきものである。今後も学級経営や児童交流の中で、道徳教育について大切に扱っていきたい。	A	A

特別活動	○様々な集団活動に自主的・実践的に取り組み、互いのよさや個性、多様な考えを認め合う風土を醸成することができたか。	A	・学校行事や児童会活動は、児童が主役となって活躍できるよう実施し、互いのよさや個性、多様性、多様な考え方に触れる学びの機会を充実させることができた。 ・今後も、児童会活動やボランティア活動、異学年との交流、地域の方々との交流など、教育目標や重点と照らしながら、実施していきたい。	A	A
健康安全指導	○自らの心身を鍛え、自他の生命を尊ぶ実践的態度を育てる健康・安全指導の充実に努めることができたか。	A	・栄養教諭による「食育」、タイムリーな「保健便りの発行」など、様々な活動を通して児童の健康に対する意識を高めることに取り組んできた。 ・児童引き渡し訓練を設定し、有事の際に混乱を招くことのないようにしている。また、地域安全マップを充実させた。	A	A
家庭地域との連携	○教育活動の実施に必要な人的または物的な体制を家庭や地域の協力を得ながら整え、連携及び協働を深めることができたか。	A	・毎月の交通安全指導やスキーボランティアなど、家庭や地域の協力を得ながら、円滑に連携をとることができた。	A	A
小中一貫教育	○中学校区の「めざす子ども像」に基づき、大麻東中・大麻東小と連携を取りながら、自校の教育活動を推進することができたか。	A	・合同会議において、各部会で進捗状況を確認しながら、業務推進にあたった。 ・乗り入れ授業や部活動体験、研究授業の参観など、中学校区で連携を密にしながら、互いの学校の実態を把握し、自校での取り組みに生かすよう努めた。	A	A
【評価項目の設定、達成状況及び改善の方策に関する学校関係者評価委員の意見】 ・誰一人取り残さないという経営方針を先生方も理解していることを強く感じた。協働体制にもとづく運営について、様々な立場で働いている職員の方々がいる中で協力体制ができているように思う。 ・小学校と中学校を比べると中学校はノートにまとめてすすめている。家庭学習の質を高めていかないと小学生もいけないと感じている。家庭学習の指導について、指導の共通化がすすめられないか。 ・ICTも大切だが大切なものを見失ってはいけないとも思う。ICTと両面でいけると素晴らしいと思います。 ・交通安全については今年は雪も少ないので安心であるが、道路の歩き方については子どもたちに声をかけている。子どもたちはよくわかっているので褒めるようにしている。					

【評点】 A：よい B：おおむねよい C：ややよくない D：よくない